

土佐打刃物の歴史

高知県は南海道に属し日本書記の時代より土佐国と呼ばれていました。

全国でも屈指の温暖多雨地であり、古くから良木に恵まれ、多くの木材を搬出してきました。それに伴って、山林伐採に必要な打刃物が古くから造られました。

また鎌倉時代後期、徳治元年(1306)大和国より移住の刀鍛冶、五郎左衛門吉光派が室町末期(1580)まで繁栄し、打ち続く戦国の乱世で武具刀剣等の需要に応じておりました。又彼等刀鍛冶の影響は農、山林用打刃物鍛冶とも技術的にもあいまって多くの鍛冶屋が土佐国内に点在していました。

天正十八年(1590)土佐一国を総地検した、長宗我部地検帳に、399軒の鍛冶屋が居たことが記されています。

土佐打刃物の本格的な隆盛は、江戸時代初期土佐藩の財政窮迫による、元和改革(1621)により始まります。藩は森林資源の確保や、新田開発の振興政策を遂行し、家老職野中兼山の農、山林収益策により農業林業用打刃物の需要が拡大し土佐打刃物の生産量品質共、格段に向上しました。

こうして鍛冶屋の切磋琢磨の貢献が、他に比類なき土佐打刃物を生み出しました。

土佐打刃物は多少の機械化は取り入れたものの、江戸時代の技術と伝統は、現代平成の世まで受け継がれています。